修士論文（要旨）
2016 年 1 月

CSCL 環境における協働学習コミュニティの考察
ーなぜ彼らは日本語翻訳学習グループ X に参加し続けるのかー

指導　宮副ウォン　裕子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
214J3003
斉　茜芸

Master's Thesis(Abstract)
January 2016

An Investigation of a Study Group Community in a CSCL Environment
A Case Study of the Participation and Motivation of Members of Group X

QIANYUN QI
214J3003
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J.F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Yoko Miyazoe-Wong

目次

第1章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1.1　研究背景と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1.2　用語の定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
1.3　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
1.4　本論文の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第2章　グループXというコミュニティの概観・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
2.1　コミュニティの成立・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
2.2　コミュニティの歩み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
2.3　参加方法及び評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
2.3.1　参加テストへの要求・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
2.3.2　参加テストの評価項目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
2.3.3　参加テストの評価方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
2.4　独特なシステム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
2.4.1　役割分担・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
2.4.2　添削者担当制度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
2.4.3　レベルアップテストと添削者養成システム・・・・・・・・・・・・・ 18
第3章　調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
3.1　調査協力者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
3.2　調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第4章　参加者の変容　−アンケートの分析から・・・・・・・・・・・・・・・ 25
4.1　分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
4.2　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
4.2.1　翻訳において不可欠なモノ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
4.2.2　グループXというバショ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
4.2.3　人とのツナガリ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
4.3　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第5章　参加者間の相互作用　−インタビューの分析から−　・・・・・・・・・41
5.1　調査協力者のプロフィール　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
5.2　分析・考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
5.2.1　翻訳することでリラックスする　・・・・・・・・・・・・・・・・・43
5.2.2　学問の道には終わりがない　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
5.2.3　社会的な関係を築く　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
5.3　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第6章　まとめと今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
【参考文献】
【添付資料】

近年、日本のポップカルチャー文化が全世界中に広がるとともに、インターネット上には日本語能力向上の為に日本語の作品を翻訳することを中心とするグループが多数現われている。各グループの活動方法はそれぞれ異なっているが、目的は共通しており、翻訳を通して自分の日本語能力を把握し、磨くということである。このような学習環境はいわば CSCL(Computer supported collaborative learning)環境における日本語学習である。中原ら(2000)は CSCL とはネットワークに媒介された学習の場に、共通する目的やプロジェクトを有する学習者同士が集まり、自らの知的探究を外化し、他の学習者の様々な視点にさらされつつ議論と討議を進め、協働的に知を再吟味しつつ作り上げていく実践的学習活動の総称であると定義している。

本論文は、アクションリサーチ(参与観察・アンケート・インタビュー)の手法を用いて、1) 参加動機は何か、コミュニティの翻訳活動へ参加によってどのような変化が起こっているか。2) 変容の要因は何か、またその要因は継続参加動機にどのように関連しているか。3) それらの変容が参加者間にどのような相互作用を行っているかについて調査し、グループ X というコミュニティへの参加が彼らのアイデンティティ・生活・性格などに与える影響を明らかにした。

本論文では一般的な認識である学習の場所「教室」とは異なる学びの場、インターネットにおけるグループ X という日本語翻訳協働学習コミュニティの活動を中心に考察した。この協働学習コミュニティでは、教師や専門家から伝達された知識を個人の「頭」の中に蓄積するという形でなく、様々な独特のシステムでの翻訳者と添削者の相互学習を通し、同じ学習者同士がお互いに教えたり教えられたりしながら、共に成長している。これが、従来の学習コミュニティとは大きく異なる重要な点である。

アンケート調査データからは、自己の日本語能力の成長だけを目指していた参加者達が、コミュニティ活動への参加とともに、参加動機を日本語能力の向上のみならず、人間関係、思考力やコミュニティへの帰属感などを変容させていることが明らかになった。また、インタビュー調査データからは、その変容が参加者の間で起きている相互作用であることを、データから実証的に分析・考察した。考察結果は概ね「翻訳活動」と「人間関係」の 2 つポイントにまとめられる。

「翻訳活動」では、日本語能力を向上させるには日本語の知識を大量に覚えて使いこなせば済むという伝統的な考え方を持っていた参加者がコミュニティ活動への参加を通し、母語の重要性に気づき、それまで言語学習においてあまり重視されていなかった思考力の重要性をも痛感するようになったことを論じた。また、参加者達は自身の趣味として、母語と日本語の意味を確認することで満足感を感じるうちに、本来重苦しい印象が持たれる翻訳活動を、リラックスできる楽しみに変化させていた。喜びの体験を多く積み重ねていくことで、コミュニティに参加し続けている。さらに、読解力を中心に日本語能力も順調に向上し、様々な手段でなかなか意味が分からない知識も調べられるようになった。参加者達は参加初期のように漠然と日本語を学習しようとしているのではなく、自ら学習の目標・内容を決定し、生涯にわたって自律的に学び続けるとも言える。

次に、「人間関係」についてだが、参加者はお互いを尊重し配慮しあいながら個性を発揮できるメッセージを送ることで「私はグループ X の成員」という意識を少しずつ形成し、コミュニティへの帰属感を深めている。翻訳者には、添削者に対する「上下関係」の意識の変化により、自分の学習方法を改善したり、競争意識を持ち始めたりする現象が窺える。一方、添削者は、添削の役割に対する理解を深めることにより、翻訳者・翻訳文への対処の方法（ストラテ

ジー）を多様化させ変化させている。相手の考えを理解しようと努めたり、自分の考えより翻訳者との人間関係を優先するなど、他人との協調性を重視するようになってきている。このように、参加者たちの間の関係が縦方向のみに固定されず、常にダイナミックに変化し続けていることは、コミュニティの活動へ持続的に参加できる可能性の一つの要因になっていると思われる。

しかし今回の調査結果が、全ての参加者に当てはまるとは限らない。今後は、より多くの参加者が「翻訳活動」「人間関係」への主体的かつ有意義な気づきが体験できるように、長期的に参加することができず中途退会した参加者の退会動機についても調査し、コミュニティシステムの改善案も提示していきたいと考える。

参考文献

阿部啓子(2010)「SNS(Social Networking Service)を使用した日本人との交流活動の試み-中国における日本語学習者を対象として-」『日本語教育方法研究会誌』Vol.17 (1) 14-15

A.P.コーエン（著）吉瀬雄一（訳）(2005)『コミュニティは創られる』八千代出版

A.Hマズロー（著）/小口忠彦（訳）(1987)『人間性の心理学』産能大学出版

池田玲子/館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門-創造的な学びのデザインのために-』 ひつじ書房

石田靖彦/吉田俊和(2015)「友人との関係の親密さと友人の特徴が生徒の学習動機づけに及ぼす影響」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』第5号　133-140

大塚薫(2008)「SNSを利用した日本語作文授業の試み:対面教育及び遠隔教育を統合した授業」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』第2号　58-72

尾島恵子 (1997)『楽しい翻訳』明和印刷株式会社

香川正弘/鈴木眞理/佐々木英和編 (2008)『よくわかる生涯学習』ミネルヴァ書房

河野一郎(1975)『翻訳上達法』講談社現代新書

小林由子(著)青木直子/尾崎明人/土岐哲(編)(2001)「認知心理学的視点」『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社　55－66

国際交流基金(2009) 『新しい「日本語能力試験」ガイドブック』〈http://www.jlpt.jp/reference/pdf/guidebook1.pdf〉(2015/01/10)

鈴木有香 (2004)『交渉とミディエーション　協調的問題解決のためのコミュニケーション』三修社

セーラ・パスフィルド-ネオフィツ/諸伏麻里/ロビン・スペンス-ブラウン(著)トムソン木下千尋(編)(2009)「実社会への架け橋-初級者に対する SNS を利用した日本語教育-」『学習者主体の日本語教育-オーストラリアの実践研究』　143-160

Deci,E.L. (1975) Intrinsic motivation. New York: Plenum Press

高木正則/田中充/勅使河原可海(2007)「学生による問 題作成およびその相互評価を可能とする協調型WBTシステム」『情報処理学会論文誌』48(3)　1532-1545

高橋敦(2014)「グローバルネットワーク時代における「新しい日本語学習者」とオンラインコミュニティへの需要」『桜美林言語教育論叢』第10号　139-156

寅丸真澄(2015)「日本語教育実践における教室観の歴史的変遷と課題 ： 実践の学び・相互行為・教師の役割に着目して」『早稲田日本語教育学』第17-18号　41-61

中原淳/西村年寿/杉本圭優/堀田龍也/永岡慶三(2000)「CSCL環境デザインに関する理論的考察」『メディア教育研究』第5号61-74

中原淳/浦嶋憲明/西森年寿/鈴木真理子/今井靖/山際耕英/永田智子(2002)「相互評価機能を実装した電子掲示板の開発と評価」『日本教育工学雑誌』26　33-38

西口光一(1999)「状況的学習論から見た日本語教育」『大阪大学留学センター研究論集　多文化社会と留学生交流』　第3号

日本語能力試験サイト(2012)「日本語能力試験 Can-do 自己評価調査レポート《最終報告》」〈https://www.jlpt.jp/about/pdf/cds_final_report.pdf〉(2015/04/30)

原田照子(2015)「LMS(Moodle)を利用した多読の可能性-多読後のフォーラム投稿文を中心に-」『桜美林言語教育論叢』第 11 号　109-125
Littlewood,W.(1999) Defining and developing autonomy in East Asian contexts. Applied Linguistics,20,71-94
レイヴ/ウェンガー（1993)『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書
布施雅彦/湊淳/小澤哲(2002)「ビデオオンデマンドとウェブデータベースを利用した相互・自己評価システムの開発－高専における問題解決学習の事例－」『教育システム情報学会誌』19(4)　206-211
松村明（編）(2005)『大辞林　第二版　新装版』三省堂
水谷信子(2007)『日本語の教室作業: プロ教師を目指すための 12 章』アルク
宮崎里司/J.V.ネウストプニー（1999)『日本語教育と日本語学習　―学習ストラテジー論にむけて―』　くろしお出版
宮副ウォン裕子(2014)「ヴァーチャル映画討論会の言語の社会化」『言語教育研究』第 5 号　1-12
山口仲美編(2003)『暮らしのことば擬音・擬態語辞典』講談社
山田政寛/北村智(2010)「CSCL 研究における「社会的存在感」概念に関する一検討」『日本教育工学会論文誌』33(3)　353-362